

## まえはら 前原 I 遺跡

— 青き石に込められた古墳時代の技 —

主任嘱託調査研究員 加藤 貴之

### 遺跡の立地と周辺遺跡

前原 I 遺跡は印旛郡栄町龍角寺に所在し、印旛沼と根本名川やその支流である十日川に挟まれた標高 30 m ほどの台地上に立地している。遺跡の立地する台地には印波国造の墓とされる竜角寺古墳群が造られており、現在では「千葉県立房総のむら」として遺跡が良好に保存され、人々の憩いの場として活用されている。

周辺では、県道成田安食線のバイパス工事や龍角寺ニュータウンの造成、坂田ヶ池総合公園の建設等により多くの遺跡の発掘調査が行われており、古墳時代から奈良・平安時代の住居跡などが多数検出されている。さらに、この地域では古代の寺院である龍角寺や古代の役所である埴生郡衙に推定される大畑 I 遺跡などが発見されており、印旛沼周辺地域のなかで最も中心的な地域の一つとして注目される。

### 遺跡の概要

過去において、前原 I 遺跡は県道成田安食線の工事に伴って昭和 55 年に(財)千葉県文化財センターにより発掘調査が行われ、古墳時代中期を中心とした住居跡が 6 軒、古墳時代後期の方墳が 1 基検出された。住居跡からは多数の滑石製品の未成品や剥片が出土したことから、滑石製品の工房跡が発見された遺跡として知られていた。

今回の調査は昭和 55 年の地区に隣接した台地の縁辺部である 1,730 m<sup>2</sup>を対象として、平成 18 年 6 月に行なった。調査の結果、古墳時代中期の住居跡 6 軒、土坑 14 基、溝 1 条を検出した。出土遺物には古墳時代中期の土師器(埴・高埴・埴・甕)、鉄製品(刀子・鏃)、土玉、管玉、砥石などがあり、特に 1・3・5 号住居跡からは滑石製の白玉・有孔

円盤・剣形・勾玉・紡錘車や、それらの未成品及び剥片が多数出土していることから、滑石製品の工房跡と考えられる住居跡である。

### 調査の成果

#### 〈1号住居跡〉

調査区の南端に位置し、昭和 55 年に調査された 3 号住居跡と同一の住居跡で、北側の約半分を検出した。住居跡の規模は一辺 6.4 m である。

遺物は、滑石が多数出土しているが、土器は少なく、埴・甕などが少量出土している。今回の調査において、滑石は全部で 1,123 点 (853 g) 出土し、特に住居跡の北西側から多く出土する傾向が認められた。未成品には白玉(穿孔途中のもの)・有孔円盤・剣形があり、他にも板状のもの、原石と考えられる大型のものなどが出土している。

#### 〈3号住居跡〉

調査区の中央に位置し、近世の室状遺構によって削平されている。一辺が 7.8 m ほどの大型の住居跡で、深さは 1 m を測る。

1 号住居跡と同じく、土器の出土量は少ないが滑石が多数出土している。滑石は計 1,411 点 (954 g) 出土しており、住居跡の北東側から中央、南側にかけて多く出土している。未成品には白玉(穿孔前のもの、穿孔途中のもの)・有孔円盤・剣形・管玉・紡錘車があり、板状のもの、原石と考えられる大型のものなども出土している。

#### 〈5号住居跡〉

調査区の北側に位置しており、すぐ北は急斜面となっている。一辺は南北 7.6 m、東西 8.5 m の大型の住居跡で、2 基の貯蔵穴を検出した。

他の住居跡に比べ土器の出土量が多く、完形に近

い土器も出土している。出土した土器には高坏・埴・甕・手捏ね土器があり、特に埴が多い。滑石は1・3号住居跡よりも少ない計60点(330g)で、未成品には白玉(穿孔途中のもの)・有孔円盤・勾玉がある。他にも砥石と考えられる緑色凝灰岩が1点出土している。

## 滑石製品の製作と製作工程

### 〈製作状況〉

1号住居跡では住居跡の北西部において、特に滑石が多く出土する傾向が見られた。その1号住居跡から出土した白玉の未成品は全て穿孔したものであるが、昭和55年の調査部分からは穿孔前の未成品が出土している。また、3号住居跡では穿孔前・穿孔したものと、両方の白玉未成品が出土しているが、その出土位置には違いが認められた。

このことは、住居内の違う場所で整形と穿孔が行われていたこと、つまり製作工程によって作業位置が異なっていたことを示しており、そこから白玉の製作が分業化していた状況が推測される。

### 〈製作工程〉

今回の調査では様々な未成品が出土しているが、なかでも白玉・有孔円盤・剣形が多く、各工程を示す資料が得られたことから、次のような製作工程が復元できる。(第4図)

白玉は、原石から板状の素材を作り、それを円形・多角形に細かく割って整形し、穿孔し、研磨して仕上げる。

有孔円盤・剣形は2通りの製作工程が考えられる。  
①原石から板状の素材を作り、それを円形・剣形に整形し、穿孔し、研磨して仕上げる。  
②原石を荒割して円形・剣形に整え、表面を整形して穿孔し、研磨して仕上げる。

## 下総における石製品の製作

下総では、古くから八代玉作遺跡・大竹玉作遺跡・大和田玉作遺跡(成田市)などで、古墳時代における石製品の工房跡の存在が知られており、なかでも利根川南岸や印旛沼東岸に集中する傾向が指摘され

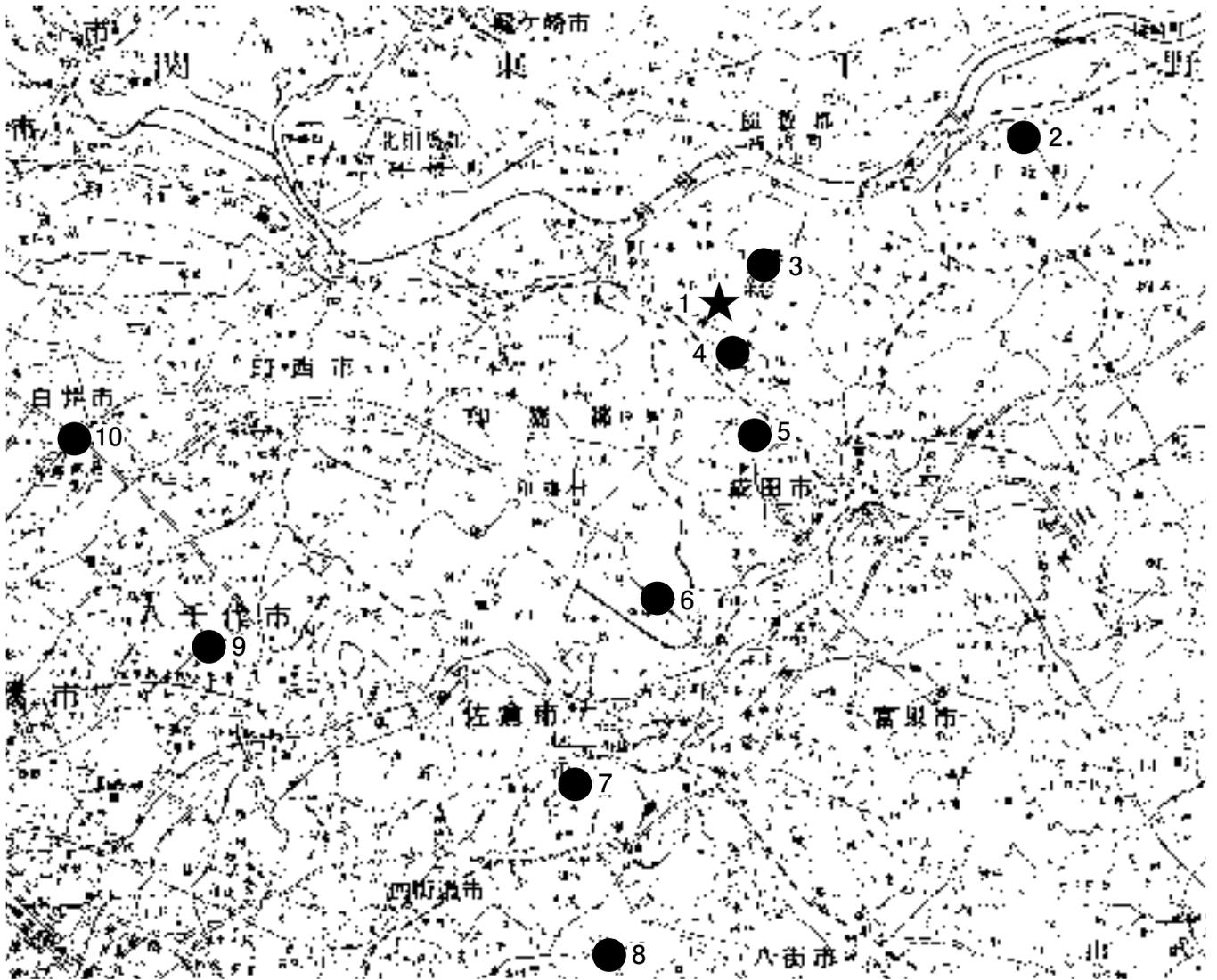
ていた。その後の調査によって、他の地域でも石製品(特に滑石製の白玉・勾玉・有孔円盤・剣形)の工房跡の検出例が増えており、古墳時代中期・後期には各地域で専門工人によってこれらの製品が製作されていたことが判明している。

こうした遺跡で製作された石製品は、主にその遺跡の周辺地域に供給され、古墳の副葬品や集落などで行われた祭祀具として使用されたと考えられる。一方で、千葉県北部の下総地域から茨城県南部にかけて特徴的に出土する石枕や刀子、工具などの模造品は、製作遺跡が発見されていないため詳細は不明であるが、白玉などと異なり、一部の限られた場所で製作され、そこから各地に供給されたものと推測される。

### おわりに

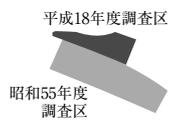
前原I遺跡では、この地に竜角寺古墳群が営まれる前である古墳時代中期の集落が発見され、滑石製品とともに多数の未成品、剥片が出土した。こうした資料は、当時の人々が滑石を使って製品を製作していた様相を明らかにするもので、古墳時代の技術の高さを知ることができる貴重なものである。

周辺には前原I遺跡と同時期の石製品の工房跡が検出されている遺跡が多く存在しており、この地域の特色として注目される。一方で、千葉県北部の広い範囲においても石製品の工房跡が発見されており、こうした遺跡との詳細な比較や今後の発掘調査の進展によって当時の生産・供給体制や、古墳時代の技術がさらに解き明かされていくことと思われる。



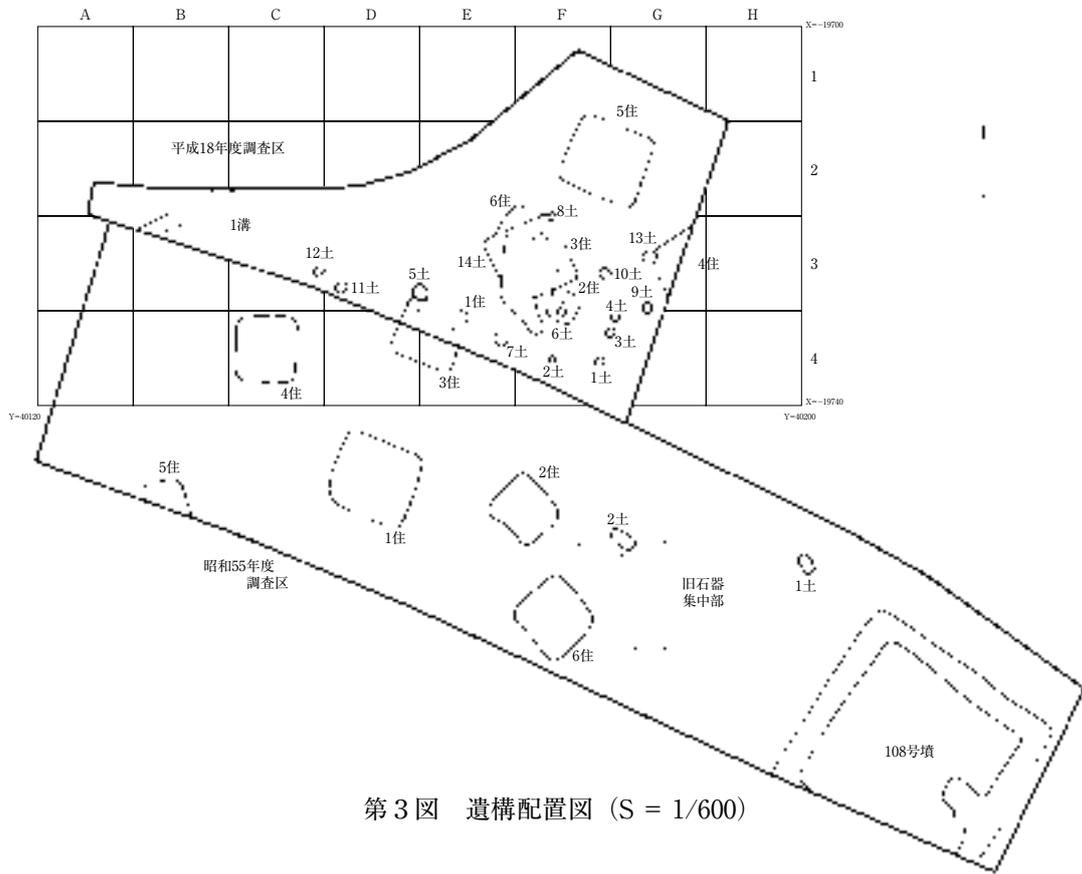
第1図 遺跡の位置と石製品の工房跡が検出された主な遺跡 (S = 1/200,000)

- 1. 前原 I 遺跡
- 2. 大和田玉作遺跡
- 3. 南羽鳥遺跡群
- 4. 大竹玉作遺跡
- 5. 八代玉作遺跡
- 6. 一ノ台遺跡
- 7. 六崎外出遺跡
- 8. 岩富漆谷津遺跡
- 9. 北海道遺跡・権現後遺跡
- 10. 復山谷遺跡



第2図 遺跡周辺の地形図 (S = 1/6,000)

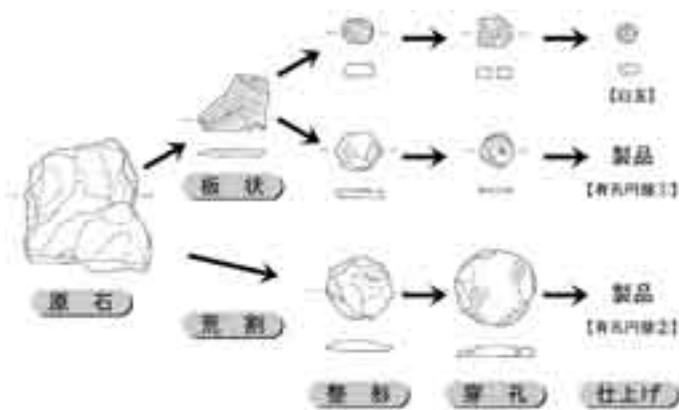
調査区全景 (北西から)



3号住居跡遺物出土状況 (南から)



3号住居跡出土滑石



第4図 白玉・有孔円盤の製作工程



1号住居跡出土滑石